

## 「鍋（なべ）」

### （第一話）

「なべ」・・・なんともいえない響きである。  
皆さんも大きな声で言ってほしい。



「なべ」

「な」の音は主張の音である。「ぱ」とか「だ」いう破裂音と違い、しっかりとして且つ落ち着いた感じを醸し出す。

それに対し、後に続く「べ」の音はなんというだらしなさだろう。

「べ」という音に洗練さは感じられない。

例えが悪くて申し訳ないが、昔、「ベ平連」という団体があったことを思い出した。ベトナム反戦団体でたいへん立派な活動をしていたのだが、どうも名称だけ聞くと野暮ったい感じがするのは気のせいだろうか。

この性格の不一致の典型の様な「な」と「べ」を一緒に並べたのが「なべ」である。

アクセントは最初の「な」にくる。そして「べ」が小さく後に続くのである。そう考えると「べ」の何と奥ゆかしいこと、愛おしさまでも感じてしまう。

しかし、ここまで書いて気がついた。  
次に「ちゃん」がつくとどうなるだろう。

「なべちゃん」

なんと、「べ」にアクセントがつくではないか。  
そうそう、皆さんの周りにも「渡辺さん」「渡部さん」がいると思う。  
そのワタナベさんは、人生のどこかで一度は必ず「なべちゃん」と呼ばれたことがあるに違いない。  
そう。

「ちゃん」がつくと、「べ」がようやく存在感を示すのである。

「鍋」を想像してほしい。  
主役はやはり「肉」であろう。皆、先を争って「肉」をつかみたいのだが、そこは冷静に

品位を持って最初に「はくさい」をつまむ。

これで自分の冷静さを人にアピールしているのだが、まわりは決してそうは思っていない。単に「したたかさ」をアピールしているに過ぎないのである。

「な」の字は鍋に例えると「肉」である。

そして、たらふく肉を食べた後に、やっと「しらたき」の存在に気がつく。

「おお・・・いたのか、しらたき君」

貴方は幾度かつぶやいたに違いない。

ほんのりと小麦色に染まった「しらたき」が愛おしく感じられ、そっと口に運ぶ。

「肉」の重厚感が「しらたき」の淡い食感で中和される。

ここで満腹感は頂点に達し、やっと箸を下ろすのである。

そして、「ふう」という満足げな溜め息が後につづくことになる。

「しらたき君、ありがとう。君のおかげでようやくピリオドを打てたよ」

貴方の腹の虫はこう呟（つぶや）いているに相違ない。

そう、このしらたきが「べ」なのではないだろうか。

それぞれの個性あるものの中に挟まれ、しかし、なくてはならないもの。

そう！ 「べ」こそ、「しらたき」なのである。

「な」と「ちゃん」に挟まれたときに存在感が光る「べ」。

もう一度口に出して言ってみよう。

「なべちゃん！」

ほら、「べ」の何と神々（こうごう）しいこと。

特上寿司のなかにあっても微妙な存在感を放つ「ガリ」的存在なのである。

.....

話が相当脱線してしまった。

と言うより、始めから脱線してしまっていた。

私が書きたかったのは「なべ」という言葉のことではなかった。

「鍋」についてある。

なぜ、今、「鍋」なのかと言うと、深い意味はない。

先日の宴会料理が「鍋」だったことをふと思い出したからである。

さて、本題に入ろう。

実は私、「鍋」が食べられないのである。

---

## (第二話)

鍋が食べられない・・・というより鍋が苦手といった方が正確かもしれない。

理由はと問われて、はっきりした理由が答えられないもどかしさがある。素材のひとつひとつに苦手なものはない。しかし鍋となると苦手な部類に入ってしまう。

まず、猫舌というのがある。  
冷やしラーメンは大好きだが、熱いラーメンは年に3回くらいしか食べない。それも店員の目を盗み、そっと水を入れてから食べるのだ。  
そばも大好きだが、メニューは決まっている。そう、「ざるそば」と「冷やしたぬき」である。うどんも好きだが、やはり水はかかせない。

今でも忘れない13年前、なにを血迷ったか「カレーうどん」を頼んでしまった。  
美味しそうな「カレーうどん」が運ばれてきた。  
さて、水を・・・と思ったが、カレーに水は合わんのではないかと思い、ふうふういいながら、そのまま口に入れてしまった。

宙を舞ったように体がくねった。  
魂が体から遊離した。遊体離脱である。  
ボクは「カレーうどん」で臨死体験をしたのかもしれない。

口のなかには溶けた鉄のようなカレーがある。顔を上に向け新鮮な空気を取り込もうとしたが、上を向いた途端、熱いカレーが喉にまで到達してしまった。  
咳き込みそうになり、慌てて下を向いた途端、メガネがどんぶりに落ちた。  
でもそんなことはどうでも良かった。  
口の中の煮えたぎったカレーが当面の大問題なのだ。  
口を半開きにして顔を振った。これは効果があった。  
やっと飲み込むことができたが、口のなかはやけど状態になってしまった。

勝負は終わった。果たして私は勝ったのだろうか。  
全て食べ終えたので勝ったと思いたい。傷だらけの勝利である。  
しかし不思議そうに一部始終をみていた店員の視線はまるで「変な光景」を見たかのように私に注がれていた。

そうか・・・私は負けたのかもしれない。汗だくになった我が身と周囲の冷ややかな空気が判定負けを物語っていた。

カレーうどん、なかなかの強敵である。

しかし私は「カレーうどん」にリベンジを挑もうとは思わない。  
さっさと白旗を上げているのである。  
できることなら「冷やしカレーうどん」というものを作ってくれないだろうか。  
冷やし中華が夏の定番メニューになっている今、何かはやりそうな気がするのだ。

---

### (第三話)

まあ、そういうわけで猫舌というのは、やっかいなものである。  
鍋・・・これがまた強敵である。どうしても鍋の中に水を入れたい衝動にかられる。しかし、皆の面前でそれはできない。  
それにも増してやっかいな問題がある。  
なんと、食べている間中、コンロの火が付いているのである。  
これではもう勝負にならない。水を入れても、入れるさきから熱せられるのである。  
しまいには鍋が溢れることは容易に想像がつく。  
まるで「ぶよぶよ」ゲームである。やっつけてもやっつけても無尽蔵に出てくる敵。すたこらと退散するのが得策である。

「逃げるが勝ち」

昔の人はいい教訓を残してくれたものだ。

しかし逃げられない場合がある。親切な人が、わざわざ皿に取ってくれたりするのだ。

※鍋を囲むとき突然に姿を現す「鍋奉行」と「悪代官（アク取り係）」

たいへんありがたいことである。何せおなかはずいているのだ。  
目の前に湯気の出たものがくる。どうしよう。さめるまで放っておいていいだろうか。お酒をつがれたときはすぐ口をつけることが礼儀である。  
かと言ってこのまま食べるとまたやっかいなことになるではないか、と尻込みしてしまうのである。

「たれ」がある鍋の場合はその点いい！　すぐタレにつければいいのだ。  
神の助けである。  
タレがキラキラ光る黄金にみえてくる。

「黄金の味」という商品もあるらしい。そのピッタリしたネーミングは誰がつけたのだろう。

多分、猫舌君が名付けたに違いない。

しかし、どっぷりと付けてしまうため強烈に味が濃くなり、あまり食べられない。すきやきの場合は「生たまご」が出るが、何と生たまごも苦手な私はお手上げ状態である。

ラーメンのときのメガネも難題である。またどんぶりに落としやしないか不安になりメガネを外す。そうなるとまた何か不安であるから、またかける。今度は湯気で曇る。

結局どちらにせよ、事態はあまり好転しない。

だから私は迷わず、「冷やし中華」を頼んでしまうのである。

しかし、この猫舌以上に私を悩ませるものがある。

それは鍋のカタチである。

---

#### (第四話)

鍋の形にも色々ある。スキヤキとかに使われる底が平らな鍋。

これは問題ない。

問題は底が丸い鍋である。土鍋というのだろうか、どうして底が丸いのだろうか。

おそらく熱まわりが効率的なのだろう。火は鍋底から側面にまわり、まんべんなく全体が熱せられるからなのであろう。

「ふん、昔の賢人め、余計なことを・・・。」

猫舌にとっては全く困った代物である。

コンロの上に不安定に乗っている鍋。コンロの鍋の乗る部分はカギ状の鉄材になっているが、鍋と接している部分は3点あるいは4点である。

不安定このうえない。



ちょっと今、このメールを見るのをやめて三点倒立をやって頂きたい。

頭が痛くなるので座布団を敷いてやっていただきたい。

どうだろうか、この不安定感。

鍋はこの状態でグツグツと煮だっているのである。  
こう思ってしまったらもうダメである。  
鍋からだんだん腰が引けてしまうのである。  
そうなれば一段と危険度が増す。  
鍋に箸を伸ばそうとすると、つんのめりそうになる。  
非常に危険である。鍋自体をつつついてしまったら大事（おおごと）である。  
何せ、あの不安定な鍋なのだ。

最近、日本で地震が多発している。前日も九州で大きな地震があった。  
私は地震のニュースを聞くと、まず時間が気になる。

この瞬間、鍋がひっくりかえって”やけど”を負った人はいるだろうか・・・。

これが朝や昼なら問題ない。朝から鍋を囲んでいる人はいないと思うからである。  
これが夜の6時くらいだったら最悪である。うまく逃げられたらだろうか・・・。

ラーメン屋さんの店員はお盆に載せたラーメンを客の頭にぎっぷりと被<sup>かぶ</sup>さなかつただろうか・・・。いや絶対いるに違いない。  
鍋から出た発想がどんどん広がっていく。

「だめだ発想の悪循環だ。鍋のことは忘れよう、底のまるい鍋なんてこの世に存在しないんだ！　する訳がない！」

とこう自分に言い聞かせるのである。

テレビのチャンネルを一気に変える。

「ホームドラマだ、ほのぼのとしたホームドラマが一番だ！」

でも、そういうときに限ってホームドラマでは茶の間で鍋をつつついている場面が映っていたりするのである。

---

## (第五話)

3、4年前くらいになろうか、支庁からお呼びがかかり花園町の合同庁舎に行ったことがある。何やら留萌地方の観光事業の一環で、「留萌地方の新しい郷土メニュー」が完成したので試食してほしいとのことだ。研究開発したのは留萌地方の民間若手組織。民間の色々な会の人を呼び、試食会ということで率直な感想をいただきたいとのことだっ

た。

どんな料理だろう。

留萌地方（オロンライン）というからには海鮮料理なのは間違いないだろう・・・。

小雪まじりの寒い日だった。日が暮れた頃、庁舎に向かった。

案内された部屋に入ると、40人くらいだろうか、大勢の人がテーブルに座っていた。支庁職員の他、天塩の人、小平の人、知っている顔も結構いた。しかし、私の視線は目の前の「鍋」に釘付けになってしまっていた。

「おおっ！やっぴりか」 海鮮物だろうということで、もしやとの覚悟はできていた。しかし、なぜ目の前に2つも鍋があるんだ？なるほど、味も2、3種類あるようだ。それにしてもものすごい圧迫感だ。鍋の空気穴から蒸気が勢いよく出ている。後ろを振り向くと、そこにも鍋が並んでいる。「ん～、そうか、囲まれてしまったか・・・」どうやら袋のネズミになってしまったようだ。

主催者の説明が始まった。なにやら「びりから」という言葉に、まずは反応してしまった。「ピリ辛？ そ・それはマズイ・・・熱いうえに辛いときは観念するしかない。そうか・・・辛さが売りなんだな。水をくれ、などど言ってしまおうと、話に水を差すことになってしまおうな。まあいい、笑顔だ、笑顔。美味しそうに食べるんだ」

硬直した体に鞭（ムチ）をうち、ひきつった笑みのなかでゆっくりと時間をかけ、皿のものを食べた。やっと食べ終えた。ひきつった笑みが本当の笑みに変わった。

「ん～、美味しいですね！ ここのちょっと辛いところがミソですね。！」

向い側に座っていた支庁長も、

「これは美味しい。留萌管内の新しいメニュー誕生ですね！」と絶賛をおくった。

和やかな空気が流れた。

これでボクの仕事は終わった。後は感想だ。皆にエールをおくる感想を言うだけだ。実際に味は良かった。鍋好きには好評に違いない。

しかし、満足感に浸っている時間はそう長くは続かなかった。

新たなてんこ盛りの皿が目の前に差し出されてきた。

「さあ、これは特別ピリカラです。熱いうちにどうぞ！ 体が芯から温まりますよ～！」

それから後のことは憶えていない。

魂がまた遊離したようだ。ふあふあとアラスカの方まで飛んでいったような気がする。

皆の前でどういう感想を言ったかもきれいに記憶がない。

\*\*\*\*\*

猫舌と温泉ギライには共通するものがあるのか？

温泉はなぜあんなに熱いのか。ゆるい風呂もあるが、なぜあんなに冷たいのか（^^;）

温泉に行って温泉に入らない人は結構いるのだろうか。

癩（しゃく）にさわるので、ボクは部屋の風呂に3回入ってやることにしている。

---

## （第六話）

鍋・・・されど鍋である。

でも最近、鍋を攻略できそうな気がしてきた。

まずは座敷で食べるスタイルである。

不安定な三点倒立スタイルの鍋に対峙するスタイル、そう、あぐらではなく、”立膝”<sup>たちひざ</sup>である。

さあ鍋よ、いつでもひっくり返っていいゾ。極真空手の猫足立ちにヒントを得た戦いのポーズだ。

これだ、俊敏に動けるこのポーズと気構え、これが最適な鍋かこみスタイルだ！

しかし礼儀作法においては最低ランクの評価であろう。

一難去ってまた一難。

そしてこの次にくるのが、足をヨコに流す、いわゆる女性すわり。

優雅に、そして俊敏に動けるこの姿。シナをつくれればさらに優美<sup>ゆうび</sup>だ。これである！完璧だ。

私がこの座り方をしても変な目で見ないでいただきたい。

私にとってはようやくみつけた究極のスタイルなのである。

どうやらゴールがみえてきた。

私にとっては難関中の難関、鍋の中の鍋とも言える鍋の王様、

そう、「鍋焼きうどん」



これをクリアーしたとき積年の涙ぐましいチャレンジが終止符を打つのだ。

キング オブ キングの鍋焼きうどん君、もうしばらく待っていてくれ。

君に会う日は近い。ボクは真摯に君と対峙したい。  
トウガラシをふんだんにかけ、真っ正面から挑もう。  
君も沸騰さめやらぬ状態で向かってきてくれたまえ。

生涯、親友となりそうな君に会う日が楽しみだ。

<< 「鍋」おわり >>

澤井 篤司 \_/\_/\_/\_ \_/\_/ (2005.5.12) \_/\_/\_/\_ \_/\_/

2005年5月「社長さんのメル友クラブ」に配信

---

#### (第七話)

「鍋が恋しい季節になりました。……」

いよいよ、こんなフレーズが目につく季節になってきた。  
前に「鍋」のシリーズコラムを書いたせいか、「鍋、キライなんですよね」  
と聞いてくる人がいて閉口する。

「いえ、キライじゃありません」

「えっ、キライなんでしょ」

「いやいや、キライじゃありませんよ。ただ、苦手なんです」

「ははっ、苦手ってことはキライなんだ (笑)」

「とんでもない、キライじゃないですよ。好きですよ。ただ苦手なんです (笑)」

と訳のわからない会話になってしまう。  
どうも私の言いたいことが伝わらないもどかしさがある。

例えば、ある人がこう言ったとする。

「ボクはあの〇〇スナックが好きです」

「へえ～〇〇に行っているんだ～。 で、そのママが好きなんですよ」

「えっ、(笑) ママもいいママですよ」

「そうなんだ～、愛してるんだ」

「はぁ？ いやいや、そうではありませんよ。好きだということです (笑)」

「好きってことは愛してるってことですよね」

とまあ、こんな会話に近い。

かなり違うが、遠くはない。

「遠くはない」 ってことは「近い」ということである。

また訳のわからん論法になってしまった。

とにかく「鍋が恋しい季節になってきた」ということだ。

皆さん、夏の疲れを癒し、心身共にリフレッシュし、また各々の道で鋭意頑張りましょう！  
夏の終わりに皆で輪になり鋭気を養う。

輪の中心には、当然存在感のある「鍋」。

今時期、絵になるではありませぬか (笑)

澤井 篤司 \_/\_/\_/ \_/\_/ \_/\_/\_/ (2005.09.24) \_/\_/

「鍋 (なべ)」 1～7はこちらから

<http://e-sawai.co.jp/newspaper/20050523nabe.pdf>